

(翻訳) ノーマン・ホームズ・ピアソン著

## アメリカ文学史18世紀

鈴木敦巳・日夏 隆

一般的に言って、南部の住民たちの自らの文学の創成に対する無関心は、18世紀まで続いた。彼らの関心は、本の題材同様英国にとどまっていた。例外もあった。ロバート・ビバレー（約1673-1722）はその『土着民によるバージニア州の歴史と現状』（1705）において、ユーモアと常にバランスをもって彼の故郷の歴史的発展、天然資源また当時の生活を記述している。少し北では、エビニー・ザ・クックが“... アメリカのある地方の住民の供宴と戯れ、余興と酔っ払いのたわごと。”という副題が示すような、調子のよいカプレットで『タバコ仲買人』（1708）という移民の英国人のメリーランドへの旅を歌っている。

ウィリアム・バード(1674-1744)。

もっと文化的な植民地生活はヴァージニア様式と自ら呼ぶウェストオーヴァーのウィリアム・バードの作品に見ることが出来る。彼は英国で初期の移民の最も良き伝統の下で教育を受け、1698年から1704年までは植民地へのロンドン派遣員であった。ヴァージニアに戻り、ジェームス川の壮麗なジョージア風の豪邸ウェストオーバーを創設した。そこでの彼の4千冊にも及ぶ蔵書は植民地随一といわれる。ヴァージニアとノースカロライナの境界を確定した時書いた『1728年に始まる境界線の歴史』、『1732年における鉱山への旅』。さらに『1733年のエデンの地への旅』は、自らの土地の視察と、“秘密の日記”であらわにした、つる個人的生活実感とヴァージニア人社会を描いたものである。これの中で中央は騎士的で、辺境では“無骨物の地”であった南部人風的生活をきわめて詳細に述べている。

### ニューイングランドと中大西洋地方

ジョナサン・エドワーズ(1703-1758)。

ニューイングランドは、教会が充実な権威を失い始めてからも宗教的著作に力点をおくことにこだわった。このピューリタニズムのたそがれ時に一人の偉大な作家が登場した。かつてのアメリカ文学士の扱いにおいてはジョナサン・エドワーズは専らニューイングランドの信仰生活を一時的に一扫した信仰復興運動、大覚醒、の最中に著した威嚇的な説教『怒れる神の手の中にある罪人たち』（1741）で取り上げられていた。この極端な見解のある種の補正は1723年に彼がサラ・ピエールポイントに当てた優しく若々しい作品に注目するとことによってなされるかもしれない。

その中で彼はフィアンセに、ソロモンの歌の一節で呼び掛けている。彼女の神にも似たある種の神秘性はエドワーズの初期の歌『自然』に姉妹編を見ることができる。“人の顔貌の美や麗しさは必ずしも心の気高さと呼応してはいないが、自然の美はまさに卓越した人の子のみ姿の顕在をしのばせる。”と歌っている。しかしながら、エドワーズをアメリカ史において理性的な知性として認識させたのは形而上学へのつる関心であった。20世紀には神学と哲学への関心が復興するに伴い、エドワーズの名声は主に『意志の自由』(正確には『善、悪、報酬、罰、栄誉、非難等の道徳的施行者とみなされる意志の自由という現在普及しつつある概念に関する慎重かつ厳密な調査』)というような作品からもたらされた。その中の必要の原理は現代批評家のピエール・ミラーの「彼こそアメリカ屈指の芸術家であった。」との卓越した哲学的洞察を生むに足るものであった。

ベンジャミン・フランクリン(1706-1790)。

ベンジャミン・フランクリンは年代的にはエドワーズと同じだが、1723年彼が故郷ボストンからフィラデルフィアに脱出した時その人生設計と考え方においてニューイングランドの古い習慣に代わるものを志向していた。フランクリンは幼年期に学んだ教えを捨てたわけではない、ただそれを事業と政治という実務に転用しただけのことだ。作家であると同様、政治家であり、発明家、印刷屋そして出版までをこなし、あらゆる活動に手をだす18世紀が呼ぶ“完全な人”を実演した。総ての活動の方向性は彼には明らかだった。「神に最も喜ばれる奉仕は人に尽くすこと」と言い、コットン・マザーの息子に父の『善行論』(元題は『善行…』, 1710)に関して、「もし私が、お考えどおりの有益な市民であれば、それはこの本のお陰である。」と書いた。毎年出版した多数に及ぶ『貧しきリチャードの暦』(1733-1758)において彼は、「私は他に本など買ったことのない人達を啓蒙するにはこれこそふさわしい手段だと考えた。それで私は暦のあらゆる小さな空間をことわざで埋め-勤勉や儉約を説き勧め、それによって徳を保証する。」“それによった”以下が意味するところは後世から批判を仰ぐかもしれないが、貸借した格言を、磨きあげ、アメリカの記憶に収まるまでに簡潔に修正し、ピューリタンの教訓的な傾向をフランクリンは引き継いでいたことは間違いない。一連の格言の要約である『富への道』(1758)は400回にもわたり多くの言語で再版されており、ある意味で成功へのアメリカンドリームを規定するものとなった。フランクリンがフランスの法廷で厚顔な田舎の代表として成功していた時のパセイの私的記事として載った逸話集は、ガーリック的要素を地元の機知に与え読者を魅了し続けた。しかしアメリカの古典となったのは未完のままであったが1771年に始まった『自伝』であった。自身の息子のためピューリタンの自己反省として虚心で始めたものだが、すべての息子に当てた例証として、アメリカで1818年出版される前にイギリス、フランス、そしてドイツで出版された。それは物質的繁栄からくる自信を描いたアメリカ人自身の言葉による自画像であった。

## 他の作家

18世紀のアメリカには文学の大作はなかったが、後世に残るものもあった。ニュージャージーで生まれ仕立て屋として修行したジョン・ウールマン(1720-1772)は、クエーカーであったが、クエーカー教徒の内的平安を適切に描いた『ジャーナル』を著している。「ジョン・ウールマンの作品を暗記せよ」とチャールズ・ラムは言った。中央の植民地のウィリアム・バートラムの『北部南部カリフォルニア、ジョージア、東部、西部フロリダを経ての旅』もラムが称えた作品である。バートラムは自然愛好家であり、詩人の繊細な目をもって旅行記を書いた。ロマンティックな心を豊かで魅惑的なアメリカの風土へと誘った。サムエル・テイラー・コウルリッジは『老水夫の歌』に、ウィリアム・ワーズワースは『序説』にその表現を借りている。ロバート・サウジー、パーシー・ピッシュ・シェリー、そしてロード・テニソンもバートラムの自然の詩の翻訳の影響を受けている。

アメリカの独立戦争が終わると、新世界とその住民に対する関心は一層活発になった。この好奇心を満たす一連の書簡の随筆がフランス人ミカエル・ギローム・ジーン・ドゥ・クリーヴケール(ペンネームはJ.ヘクターセント・ジョン、1735-1813)によって出された。彼は1765年にアメリカに帰化しアメリカ人を妻とした。彼の『アメリカの農夫からの手紙』(1782)は、ホイットティアの『雪にとざされて』(1866)の先駆をなした『あるアメリカの農夫に影響を与える吹雪』や、『アメリカ人とは?』といった彼の中心的課題を網羅したものである。アメリカは好機である—そこで働く者は安心して頼れると彼は言う。新国の声を借りて彼はかいている。「私はあなたに衣食を与える。佇んで、子供達に栄えることの意味を語る暖炉を、安らかに伏すベッドを与える。他に自由人の免責を賦与する。もし汝が子供達を教育し、神への感謝を教え、政府を、かくも多くの人を集め彼らに幸せをあたえているあの博愛的な政府を敬うことを慎重に教えたなら、私は汝の子孫と総ての善人にこれこそ最も聖なる、最も力強い、最も誠実な願いであることを、そして死に際しての最も慰めに満ちた期待であることを諭そう。汝は行きて栄えを求めて働け、正しく、感謝をもって、勤勉にあるように。」同時代の多くの作家たちも彼同様に新しいアメリカについて楽天的であった。この時代には、詩は次第に数を増したがほとんど顧みられなかった。トマス・ゴッドフリー(1736-1763)やフランシス・ホプキンソン(1737-1791)はフィラデルフィアを文学の基地にするために尽力したが、アメリカのヘリコンにはできなかった。彼らは叙情詩に古典的牧歌的色彩を用いたが、新古典主義をその精神をくまずに取り入れたただけであった。ニューイングランドにおいては詩へのごく僅かの関心は“コネティカット賢人”(時には“ハートフォード賢人”と呼ぶ)というグループからわきおこった。ジョン・トランブル(1750-1831)は英国の『ヒューディブラス』を借りて独立戦争にまつわる人物を扱った擬叙事詩『マックフィンガル』(1782)の作者である。ジョエル・バーローは素朴なユーモアのひらめきとささいな事を歌った擬牧歌詩『とうもろこし粥』(1793年執筆、発行1796年)や、バーローの言葉を借りると、「道徳的、政治的」ということは、「次世代に共和国の重要性を鼓舞すること」が主題の1787年の『コロ

ブスの面影』(1807年『コロンビアード』として再筆)を書いた。エール大学長であったティモシー・ドワイトは『カナンの征服』(1785)や『グリーンフィールドの丘』(1794)を手掛けたが、今日では彼自身が見た詳細な日常生活を描いたニューイングランドとニューヨークの旅という随筆の方がなじみ深い。もしこの三人の“賢人”や、他のメンバーが芸術的に成功していないとしても、少なくとも自国が文学的価値をもつという健全な関心を示したことは否めない。彼らの時代から“自国の文学”への願望が悲願となり、それが時に狂信的愛国主義になっても、貴重な刺激をあたえている。“賢人”より詩的に成功したのはニューヨークのフィリップ・フレノーであり、プリンストン在学中よりその才は発揮され、英国詩をよくまねた『幻想の力』を書いた。しかしフレノーは「政治と文学の独立性は全く別のものである。前者はここ七年の内に完成を見たが、後者が効果的に機能するにはなお何世紀もかかるだろう。」といてその類似性を認めなかった。彼は根本原則的なことを語っている。多くの政治的闘争の詩の作者であるが、『野に咲くすいかずら』(1788)や『インディアンの墓』(1788)という初期のロマンティックな詩でよく知られている。

#### 政治的出版物

18世紀アメリカを概括するとすれば、主として科学的合理主義の影響が増大した時代である。自然に対する態度も神聖の感知できる反映とするエドワーズの神秘主義から、現象の直接の科学的観察に変わり、世俗の直接性と共に新たな焦点がおかれた。また植民地の住民の知的生活が、益々政治の合理哲学にかかわる。それは、彼らに直接的に最も影響を与えるものであり、ある意味では18世紀の意義ある文学的成功は『独立宣言』(1776)と『合衆国憲法』(1787)の成文化にあることは否めないからである。このアメリカのみならず世界全般に及ぶ多大な影響は人間としての尊厳と権利に対する人間の信念の統合物を紙に表したものである。ジェームズ・マディソンとアレキサンダー・ハミルトンそしてジョン・ジェーが憲法擁護のために著した『フェデラリスト』もまた世紀の記念すべき政治出版物であった。

#### トマス・ペイン

「今は人間の魂が試される時代である。日や年、また世代の問題ではない。子孫にまで及び、今のやり方によっては、多少なりとも時代の終わりまで影響を及ぼす」。キケロ風の『コモン・センス：アメリカ人につぐ』(1776)は植民地で初めの三月に12万部売れたのみならず、外国においても、しばしば再版され、アメリカの政治的企てを堅固なものとし、革命の炎を広めた。『コモン・センス』は今なお版を重ねている。1774年に勃興する革命によってイギリスから植民地に連れて来られて以来ペインは革命の小道をたどり続けた。『人民の権利』(1791-92)でアメリカのフランス革命版を擁護した。『理性の時代』(一部1794、二部1795-96)は、理神論の解説で、極論をもって、18世紀の合理主義の終焉とより神学的な幕開けという道程を説明している。